
ギリ爆3 - 血液型マニュアル男のヤンキー伝記-

餓龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギリ爆3 - 血液型マニュアル男のヤンキー伝記1

【Nコード】

N0161BA

【作者名】

餓龍

【あらすじ】

中学時代、散々なイジメを潜り抜けてきた亀鶴ジオン（本名は詩音）は、高校入学時に出会ったテルがきっかけで、かつてのヤンキー魂を取り戻す。が、後ろ盾であったテルはミュージシャンを目指すと言って上京。

孤独と化したジオンだったが、幼馴染みの白鳥ユイに連れて行かれた献血で、生まれた時からA型だと思ってた血液型が実はO型だったと知る。それから生まれ変わったかのように、ポジティブで活発

な性格になったジオンだった。

1年のトップの竜崎光一、3年の総番長の宮大地と、ひよんな事から共に行動するようになったジオン。そんな2人と絆を深め、3人はいつしか親友になっていたが、様々な事件が、やがて3人の絆を壊してしまった。

竜崎は朝露雫との別れと仲間との決別、宮さんは屈辱的敗北と失恋での痛手、ジオンは盟友テルの死、佐倉との別れ、その他数々の苦難と向き合っていた。

やがて年末を迎え、今まで自分たちを脅かしていた点と点が線となり、全てが繋がり導火線となってある人物に繋がる事を知る。

一方、失恋間もない宮さんに新たな恋の予感。さらにはパーティーにジオンの妹、詩乃舞も加わり、新たな青春の始まりに心が躍るジオン。

ポジティブ全開で、ついに最終章が幕を開ける・・・！！

ギリギリ爆発

血液型マニユアル男のヤンキー伝記を、3つの章に分けてお届けしています。

こちらは『第3章』になります。

第326話 初詣（前書き）

中学時代、散々なイジメを潜り抜けてきた亀鶴ジオン（本名は詩音）は、高校入学時に出会ったテルがきっかけで、かつてのヤンキー魂を取り戻す。が、後ろ盾であったテルはミュージシャンを目指すと
言って上京。

孤独と化したジオンだったが、幼馴染みの白鳥ユイに連れて行かれた献血で、生まれた時からA型だと思つてた血液型が実はO型だったと知る。それから生まれ変わったかのように、ポジティブで活発な性格になったジオンだった。

1年のトップの竜崎光一、3年の総番長の宮大地と、ひよんな事から共に行動するようになったジオン。そんな2人と絆を深め、3人はいつしか親友になっていたが、様々な事件が、やがて3人の絆を壊してしまった。

竜崎は朝露雫との別れと仲間との決別、宮さんは屈辱的敗北と失恋での痛手、ジオンは盟友テルの死、佐倉との別れ、その他数々の苦難と向き合っていた。

やがて年末を迎え、今まで自分たちを脅かしていた点と点が線となり、全てが繋がり導火線となってある人物に繋がる事を知る。

一方、失恋間もない宮さんに新たな恋の予感。さらにはパーティーにジオンの妹、詩乃舞も加わり、新たな青春の始まりに心が躍るジオン。

ポジティブ全開で、ついに最終章が幕を開ける……！！

第326話 初詣

大晦日、家族で白黒歌合戦を見た後、カウントアップTVを朝まで見て、ぐだぐだと正月を迎えた。

翌日、朝っぱらからオレを起こす声がある。

「お兄ちゃん、ユイさんが来てるから、起きてー!!」

「はあ？ ユイだあ？ オレあゝ別にアイツと会う約束なんかしてねえよ」

「聞かないのお？ みんなで一緒に初詣行ってくつて約束してたんだよ。お兄ちゃんが言いだしっぺかと思ってたんだけど」

「何だ、そりゃ・・・？」

「あ、そゝそゝ、ユイさんの晴れ着綺麗だよ」

「は、晴れ着だ？」

ユイが正月だからって振袖着るとは思えねえ。

「待たせるの悪いから上げるよ」

「はあ？ 何勝手に・・・って、オイ、詩乃舞・・・！」

ちぎしよゝゝ、めんどくせえゝ。

渋々着替えていると……。

「きゃっ、何パンツ一枚でうるついてんのよ、バカ」

人の部屋に入るなり、いきなりユイがツッコんだ。

「着替えてる途中で勝手にオメエが入ってきたんだろが！
……って、オイ、どうしてマジブも一緒なんだよ」

「明けま……、きゃっ!!」

マジブはオレを見るなり悲鳴をあげて姿を消した。

「早く着替えなさいよ!!」

「何なんだよ、一体……」

緑を基調としたシックなデザイン。

ユイの振袖姿は眩しいほど美しく輝いている。

……たく、新年早々、きらびやかなモン見せんなよ。

……つつか、何で人の家にいるんだよ、オマエら！

「よっ、あけおめことよろ」

褐色のスーツを着こなしたオツキーが、いきなり部屋に入ってきた。

「何でオメエも来るんだよ」

「ジオンの妹さん、いつ見ても可愛いよなあ。なあ、ジオン、妹萌えとかしねえのか？」

「はあ？ 何だよ妹萌えって」

「妹萌えは妹萌えだよ。例えばさ、妹がドジっちゃった時の仕草が妙に可愛くて萌えたりさ、隠れてお兄ちゃんのシャツのニオイをクンクンかむ妹を偶然見ちゃった時に、愛おしく萌えちゃって感じたり」

「ないない。基本的にオマエはバカか？ 何だよその勝手なシチュエーションと変態的な妄想は。オマエはパソコンゲームのやり過ぎなんだよ。バーチャルとフィジカルの区別つける。……つつつか、どうしてオマエがオレン家なんだよ」

「あれ？ ジオンが企画したんじゃないかねえ？ 今日の集い」

集い？ ……まったく、新年早々何だってんだ………？

「おっ早よお、明けましちゃって、おめでとサン！ 今年もヨロピク」

宮さんが、紋付、袴はかまで登場した。

「流石宮さんですね。男の晴れ着、カッコイイですね。いや、

「はやく、凄いなあ〜」

「ガツハツハツハ、オツキーのスーツも中々似合ってるぞ」

「宮さんっ、なぜ家に?!」

「え? 今日、皆で初詣行こうって誘われたんだけど・・・」

「聞いてない!!」

「やく、ユイちゃんの晴れ着、綺麗だね〜」

「そう? 宮さんも似合うよね〜、晴れ着」

「アタシも晴れ着、着たかったなあ〜。ねえ〜、しのぶ〜、来年は絶対アタシたちも晴れ着、着ようね〜」

「ウン」

「真誓も詩乃舞ちゃんも似合いそ〜ね」

「アタシもユイ先輩みたいなグリーンにしようかな〜」

「マジブ〜はユイ先輩にゾッコンだよね〜」

「そ、そんな事ないモン」

「またまた〜、アタシは真誓が大好きよ〜」

「あ、ありがとうございます」

「あはは、マジブく赤くなってる」

「か、からかわないですよ、しのぶー!」

オイオイオイオイ、そこっ!

「ど〜という関係なんだよオマエら。初対面にしては随分仲良いじゃねえ〜か」

「え? アタシと真誓? 詩乃舞ちゃんから聞いてないの?」

「アタシとユイ先輩は、結構前からお知り合いですよ」

はえ? 知り合い?!

「マジブくはね、ユイ先輩と同じ、琵琶神社の巫女さんだよ」

詩乃舞……、知ってたんなら言えよ。

「アタシは助勤だけど、真誓は正真正銘の巫女さんよ。琵琶神社の看板娘で超ベテランなんだから」

「いえいえ、そんなことはありませんです」

「マジブくって、いつ頃から琵琶神社で働いてんの?」

宮さんが聞いた。

「中1の冬頃からだよね？」

「ハイ。ちょうど丸2年ですね」

「だよね〜。アタシとマジブ〜の付き合いも、もう2年なんだね〜」

ユイは感慨深く頷く。

「ユイちゃんとマジブ〜が知り合いってだけでオツドロキ〜なのに、マジブ〜が巫女さんだったなんて、さらにオツドロキ〜。オレらしよ〜ちゆう琵琶神社に顔出してたけど、マジブ〜の存在に気が付かなかったなあ〜」

驚きを連発する宮さんと一緒に、オレも気が付かなかったぞ。

「アタシ、存在感薄いって良く言われます」

「いやいや、ユイが濃いだけ」

「ジオン、い〜から早く着替えなさいよ」

・・・まったく、みんなど〜してオレの部屋でくっちゃべってんだよ！

そして、みんなに連れて来られたのは琵琶神社。

もうすぐ正午なのだが、物凄い人ゴミだ。

「オマエさ、このバイトって、半年くらいやってね〜？ どうしてこんなに重要な日にバイト休むワケ？」

「だってさ〜、誠さんがどうしても休めって言っただもん。忙しいから休めって」

「はあ？ フツ〜、忙しいから雇うんじゃねえ〜の？」

「お正月は凄く混むからバイトのコ沢山雇っのよ。だからアタシは不要なの」

「う〜ん、分からん。新人さんが沢山いるなら尚更ユイは必要だろ〜に。・・・つつ〜か、琵琶神社の超ベテランの看板娘もど〜して休みなんだよ」

「誠さんを悪く言うのは許しません」

頬を膨らましたマジブ〜に睨まれた。

「御託ごたたくはいいから、ホラ、中に入った入った」

オレの背中を押すユイ。

「並ばなくていいのかよ？ みんなお賽銭投げるのに並んでるんだろ？ 順番とか守んねえ〜と、神様が・・・」

「神様なんて信じてないくせに何言っただのよ！ アタシたちは」

「祈祷！！」

「祈祷？」

オレたちは強引に本殿に入れられた。

中ではすでに沢山の人たちが、誠さんに祈祷をしてもらってる最中だった。

神主姿の誠さんを見るのは初めてだ。

毅然とした佇まいに、オレの背筋は自然に伸びる。

神々しいな、誠さん……。

やがて祈祷が終わると、後ろで見てたオレたちを発見した誠さんが歩み寄ってきた。

「みなさん、ようこそお越しくださいました。明けましておめでとう、ジオン君」

「あつ、こちらこそ、新年明けましておめでとうございませう。今年もよろしく願います」

「色々不幸続きだったようだね、去年は。今年は良い年であるように、ボクも祈ってるよ」

「え？ ヨイ、誠さんに話したのか？！」

オレが佐倉にフラれた事とか、色々惨めなことを……。

「うん、全然」

ユイは首を横に振る。

「いやね、最近ジオン君たちの心が疲れきってる姿が思い浮かんでね、ユイ君に無理強いして、みんなを連れてきてもらったってワケさ」

「え？ じゃ、誠さんがセッティングしたの？ オレたちのためにわざわざ？！」

「いいからいいから、ホラ、座った座った」

ユイがオレを座らせる。

ユイのヤツ、誠さんとグルになって……。

くそ、ユイにまんまと騙だまされた……！

「たかまノはらに かむづまります すめらがむつ かむろぎ かむろみの みこともちて やおよろづノかみたちを かむつどえにつどえたまい かむはかりにはかりたまいて あがすめみまノみこととは とよあしはらノみずほノくにを やすくにと たいらけくしろしめせと ことよさしまつりきかくよさしまつりし……」

おおはらえのことば
大祓詞を唱え終わった誠さんは、オレの頭上で、白いフサフサのヤツをバサバサした。

「被い給え 清め給え 守り給え 幸え給え」

誠さんの透き通るような美しい声が胸に心地良い。

今年が良い年になりそうだ。

「ありがとうございます」

オレと宮さんとオツキーは、力いっぱい誠さんにお礼を述べた。

「いえいえ、ではでは」

ニツコリ笑顔の誠さん・・・、何か、忙しそうだ。

オレたちが本殿を出ると、次々と祈祷待ちの人たちが中に入っていた。
った。

みんなまとめてなのに、オレたちだけ特別扱い、しかも無料。

誠に申し訳ない・・・なんちつて。

「ねえ、みなでおみくじ引いてかない？」

ユイの号令で、みんなでおみくじ売り場に向かった。

「おみくじ〜？ 何も願う事ねえ〜よ・・・」

・・・と、言いつつ、恋愛成就を祈りながらおみくじを引いてみたりする。

相手いねえ〜けど・・・。

「ワオ〜、オレ、大吉だ〜」

オツキーがにこやかに小躍りする。

「私も大吉ですよ〜」

詩乃舞がオツキーの小躍りにまざる。

オイオイ詩乃舞、何はしゃいでるんだよ、バカの近くにいるとバカがうつるぞ。

「宮先輩、どうですか？」

「吉〜！ ま、無難なトコかな？ マジブ〜は？」

「アタシも吉です」

「へ〜、偶然だねえ〜」

「この世に偶然って無いんですよ。あのですね〜。…」

マジブ〜と宮さんは相変わらず楽しそうだ。

へん、仲良くやって下さいよ。

「ヤダ〜、アタシ今年も大凶!〜!」

「今年もって、オマエ去年大凶引いてんのかよ、はっはっはっは、だ〜からフラレたんじゃねえ〜の?」

「うるっさいわね〜! で? アンタはど〜なのよ?〜!」

「バカ、オレは…。」

な、何だ、コレ?

「見せなさいよ!〜!」

「…あっ」

「最凶? 何コレ、は、初めて見た。何よ、最凶って…。」

「オレに聞くなよ」

「最も恐い、最強最悪な凶って事かしら…。」

「ど、ど、どすりゃいい?」

「とにかくあそこに結びましょー!!」

オレとユイは急いでご神木のそばのおみくじを括り付ける為の紐におみくじを結んだ。

「これで結界に封じ込めたわ。大丈夫よ、きっと」

ユイが唇を固く結んだ。

「な、そんな凶とかより、おみくじに何て書いてあったか読むの忘れてねえか？ それ、一度返してくれ」

「ダメよ！ 一度結界に封じ込めたおみくじを戻しちゃったら、ダメなのよ」

「ワケ分かんねー！ そもそもオマエがおみくじを引こうなんて言い出したから、こゝいう事になるんじゃないかねーか！ もし今年オレに不幸な事があつたらどう責任とってくれんだよ?!」

「はあ？ バツカじゃないの、アンタ?! あゝゝゝ、ホント、ムカつく！ マジ、ムカつく!! せっかくバイト休んでまでアンタの為にこゝして着物まで着て祈祷してもらってバツカみたい!!」

「はあ？ それはどゝいう意味だよ！ オレは別にオマエに祈祷してくれなんて頼んでねえから!!」

「誠さんがアンタに祈祷してあげたいって言うし、去年アンタ散々だったし佐倉にフラして可哀想だと思つてさ、だからこゝして連れて来たんじゃない」

「だからオレは頼んでね〜し！ むしろ余計なお世話じゃね？ B型は世話焼きだっつゝのは百も承知だけどさ、オマエは強引さも加わって、たまにマジウザいんだよ！！」

「言ったわね？！ 佐倉にフラれたストレス溜まってるからってアタシに当たらないでよ！！」

「オマエだってI k a r Uにフラれたストレス、オレに八つ当たりして解消してんじゃねえ〜か！！」

「アタシは別にストレスなんか溜まってないんだから！！」

「そうかそうか、それは良かったな。じゃ〜、大凶だからって別に悲観する事ねえ〜な」

「アタシは最初から悲観なんてしてないわよ！ そうだ、おみくじが見たいんだっけ？ ハイ、結果から外してあげる！ 今年いっぱい、最凶を楽しんでちょうだい。アタシもアタの最凶っぷりを今年一年楽しませてもらうから」

「うるせえ〜、外すな、縁起でもねえ〜！！ あ〜〜〜、マジで外す？ バカじゃねえ〜？ オレ死んだらどうすんの？ マジでどうすんの、それ。結果外しちゃったよ、この人。マジで信じらんね〜」

「アタが外せって言ったんでしょ〜？ ホラ、読んでみなさいよっ！！」

ユイがおみくじを投げつけてきた。

ヒヨイ

寸前で鮮やかに避けるオレ。

「へへ〜〜んだ、どこ、投げてんだよバ〜〜カ」

ポヨン

ユイが投げたおみくじは、オレが避けたせいで、運悪く後ろの人に当たってしまった。

フードを被った髪の毛の長い女性の頭に当たったおみくじは、ポテツと地面に落っこちた。

・・・と、その時!!

「何ぶざけてんだよ、このアマ〜！ 湊^{レイ}さまに謝れコラ」

「湊、どうする？ やっちやう？!!」

フードの女のそばにいる、仲間と思われる女たちが執拗^{しじじ}に絡んできた。

「その晴れ着が気に入らない。トイレで脱いできてもらって」

第327話 フードの女

オレたちがふざけすぎた罰はちが当たったのだろうか？

新年早々、神社で絡まれた。

しかも、晴れ姿のユイと一緒に。

絡んできたのは3人組の女たちだ。

年は分からないが、ウチらと同世代だと思われる。

仲間に滲レイと呼ばれた女は、黒髪のストレートで、パーカーのフードを被っている。

フードの下から見え隠れする顔立ちは、一見すると可愛らしくもあり、美しくもある。

長いまつ毛とハッキリした二重まぶた、整った目鼻立ちがそう見せるのかもしれない。

アルファベットのWのようなアヒル口は幼さも醸し出し、年下？と思わせる雰囲気併せ持つが、声には凄みがあった。

たった一言、冗談ともとれる、「その晴れ着が気に食わない。トイ

レで脱いできてもらって」というセリフだったが、オレはその言葉にただならぬ恐怖を感じた。

本気で言ってるなら、コイツ、相当度胸あるぞ……？

この公衆の面前で、しかも、男連れの女性に……。

「……………」

いつもだったら何かしら言い返すユイだが、オレと一緒に何か恐怖のようなものを感じているようだ。

ユイらしからぬ、少々ビビリ気味の表情を浮かべている。

「オラ、来いよ」

仲間の女がユイの振袖を掴んだ。

どうやらマジでオレたちに絡んでいるようだ。

「オイオイオイオイ、おふぎけはその辺でやめとけよ。オレらが悪かった、謝るよ、ゴメンな」

オレはそう言って頭を下げた。

こゝいうアブナイ連中とはかわらない方が無難だ。

「ア、アタシも調子に乗り過ぎました。ゴメンなさい」

ユイも照れ笑いをしながら、ペコペコと頭を下げる。

「遷サマ？」

「いいよ、こゝで脱がして」

「マジで？ こゝじゃ、ヤバくね？」

な、何を言ってるんだコイツら……。

オレは不気味さを感じ、言葉すら失った。

「アハッ、冗談だよ冗談。謝らなかつたら振袖燃やしてたけどオ、素直に頭下げたから許してあげるウ」

「良かったな、オマエ」

「今度から気を付けろよバーカ」

フードの女と、その仲間2人は、人ごみの中に消えていった。

……な、何だったんだ？

「アタシ疲れちゃった……。そろそろ行こっか……」

引き攣った笑顔で、みんなのもとへ歩き出すユイ。

「ああ。オレも疲れた……」

オレも溜息を吐きながら歩き出す。

「ねえ、ジオン、さっきのフードの女、ど〜思う?」

「ど〜もこ〜もねえ〜な。アレは普通じゃねえ〜。何っ〜か、半端ねえ〜アブねえ〜ニオイがする」

「やっぱり、そ〜思う?」

「ああ。何っ〜か、修羅場を幾つも潜り抜けてきたっ〜か、アイツ、おそろく強いぜ」

「だろ〜ね」

「上手く言えねえ〜けど、例えるなら、ユイが初対面の一般人を脅す、みたいなの? 何っ〜か、ワルじゃなくて、正統派の怒りっ〜か、その人がそのセリフ吐いちゃダメだろ……。ってカンジ? 存在だけで十分な人が、そんな恐いセリフ吐いたら相手、泣いちゃうだろ的な……」

「そ〜そ〜、そんなカンジ。ウチらと同類？ そんな雰囲気持ってたよね、アイツ。アタシとかジオンとか、竜崎とか宮さんみたいな、真っ直ぐな何か・・・」

「タカノブもそんなカンジか？ 以前ユイ、アイツは真っ直ぐな瞳をしてたって言ってたろ・・・？」

「ウン。でも、全然違うじゃん、雰囲気。タカノブはワルよ。そんなのアタシだって一瞬見りゃ分かるわよ」

何かそれ聞いて安心。

「何だろ〜な、あの女」

「分かんないけど、もう会わないと思うし」

「だ、な」

その後オレたちは琵琶神社を後にし、それぞれ一旦家路についた。

夕方から雪が降り出し、街は銀色に染まった。

ピンポーン

さっそくおいでなすったな・・・。

「ど〜ど〜」

詩乃舞とマジブーが、着替えてきたユイと宮さんとオツキーを招き入れる。

そんなパーティーで新年はスタートした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0161ba/>

ギリ爆3 - 血液型マニュアル男のヤンキー伝記-

2012年1月1日01時51分発行